

日の開局と共に始めたが、集配事務の開始は四十三年三月六日からであった。

電信は 昭和八年三月二十六日

電話の通話事務は 昭和四年 二月 一日

交換事務は 昭和九年十一月十九日

貯金と振替は 明治四十一年三月六日

保険は 大正五年 十月 一日

年金は 大正十五年十月 一日

からである。

郵便函場は明治三十六年十月二十六日の鹿越駅前、同三十九年九月二十五日の幾寅駅前、昭和十七年十一月六日の鹿越石山（現在の東鹿越）等があつた。

現在のものは鹿越局前の昭和十五年十月十一日、東鹿越局前の昭和二十七年五月三日、旧市街曾慶方の昭和二十七年一月十四日、市内定塚商店前の昭和二十八年六月十日の四箇所ある。

電話回線は昭和四年二月一日金山―落合間（幾寅、落合、金山）、昭和二十七年十月三十一日富良野―幾寅間（富良野、鹿越、幾寅）、昭和三十三年九月十二日富良野―幾寅間（富良野、幾寅）の三回線がある。

## 第二節 落合郵便局

明治三十五年十二月十六日の開局であつて、開局と同時に郵便、為替、貯金の取扱をしている。

開局の時は落合一九四一番地の一であつたが、昭和二十七年七月十六日、字落合二〇九三番地に移転した。

開局五十年記念式を昭和二十七年八月十日に行なつたが、字落合という土地が五十年間に大きな発展を常にある一定の線にとどまつているので、局そのものも数字的に大きな飛躍を見せていないのである。

この時は新局舎の落成式と兼ねて行われたが、半世紀の歩みを狩勝峠の麓に記録した。

落合の地勢たるや、串内を経て石狩国より十勝国に通ずる唯一の交通路にあたり、函館、小樽及室蘭より発する汽車は当地に來り陸路十勝国に至る咽喉たり。

故に移住者及び農産物、木材等の当地を經由して輸出するもの多し。（明治三十八年）と局区内の概要を記してあるが、その頃の落合をこの時代の目で見ていて面白い。

当落合局区内の特産物は木材にして、農産物之につぐ木材は年々その産額を増し本年度に於て約四十万石にし

てその価格約三十万円。

取引先は小樽をて清、韓、英国等に至るもの多し、農産物は年々その産出土地改良と共に増し、小樽、函館を経て内地に搬出す。(明治四十年)とあるのもその通りである。

落合の木材が輸出されたことを筆者は始めてこの局の記録によつて知ることが出来た。

「木材は一ヶ年産出額角材五拾八万五千八百六拾五石この価格五拾八万五千八百六拾五円」とあるので一石一円の割である。

丸太材は七万式千石、この価格は三万六千円、取引先は小樽、室蘭、札幌、砂川、各炭鉱である。(明治四十四年)と書いてあるのも面白い。

大正時代では大正五年が六万石、六年が九万石、七年が丸太五万石、角材で十五万石、七年は丸太が三万石、角材で十五万石、製材で一萬石等となつている。

明治年間にくらべて非常な低下である。

簡易保険と郵便年金は 大正五年十月一日

電話は 昭和四年二月一日

電信は 昭和八年三月二十六日

電話交換は 昭和十年一月十六日

明治四十三年のところには、本年度調査物数に於て四十二年度表と本年度概要表と比較するとき、郵便物数其他にいちじるしい減数あるは、四十三年三月二十六日より、当局区内なる幾寅は無集配局なりしが、集配事務開始により、分割せられたるによると書かれている。

現在ある電回話線は昭和十六年一月六日開設の富良野落合電信電話共用回線で、富良野、鹿越、幾寅、落合に接続している。

また昭和二十五年十月一日、新得―落合間臨時電話線が通じ、新得落合電信電話線は昭和三十年九月十日に在来の新得落合線を改称したものである。

便郵函場について見ると明治三十五年十二月十六日の駅前につづいて、同四十年十月四日の狩勝駅前、大正十三年八月二十四日の上トマム郵便局前、昭和九年七月二十二日下トマム一線等がある。

最近のものでは昭和二十一年二月十五日北落合小学校同二十七年八月一日落合ルーマ藤原旅館前等がある。

歴代局長名は次の通りである。

- 1、小野 坦
- 2、有光 範 晴
- 3、森 安太郎

- 4、上原 亀太郎
- 5、池田 竜夫

### 第三節 東鹿越簡易郵便局

石灰石鋳業の発展によつて人口の増加の一途をたどつていた東鹿越に通信の施設がなく、幾寅集配局までは約六キロ、鹿越集配局までは約三キロ離れているので、住民の不便は非常に大きかつた。

しかし普通郵便局の設置条件はまだ不備なので、こまつていたところ昭和二十四年七月簡易郵便法が施行されたので、雑貨商坪井繁二が郷土の要望にこたえるために申請したところ昭和二十五年八月一日設置認可となつたのである。

商店併置の十坪で郵便物の受付、為替の受払、貯金の受払、振替貯金、保険の申込等をうけている。

### 第四節 鹿越郵便局

鹿越の通信事務は先ず駅通からであるが、これが廃止されてから郵便局が出来るまで、幾寅局区内であつたのである。

ところが幾寅は初め落合局区内なので本村は通信の上

から見ると天狗の鼻から上流地方は落合から、またこれから下流は金山から発達したのである。

昭和の初期の頃渡辺正之助の息子が学生として幾寅の高等科に通つていた頃、幾寅の局から郵便物を受取り、鹿越に持つて帰つて配達していたことも知られている。

駅前に入舟商店でポストを引受け切手を売つたが、この店を引ついだ高橋一夫が初代局長になるのである。鹿越小学校の沿革によると高橋の父が教師と郵便取扱を兼ねたことが記載されている。

しかしこれは正規のものでなかつたためか、鹿越の局歴には残つていない。

さてこれから後のことは鹿越局にのこつている書類によつて書くと、石狩国空知郡南富良野村字鹿越千百九十一番地に鹿越郵便取扱所が出来て、為替、貯金、電信、電話、郵便、小包の取扱を初めたのは昭和十五年十月十一日（開局）となつている。

昭和十五年十二月一日無集配三等郵便局鹿越郵便局となつて、各種才入金、保険金、年金の取扱を始めている。

その後無集配特定局となつたが（年月不明）敗戦の昭和二十年の十一月一日、物資不足の最中に字鹿越千百六